市制施行50周年記念事業

令和2年度第1回東久留米市総合教育会議議事録

令和2年11月7日

東久留米市・東久留米市教育委員会

市制施行50周年記念事業 令和2年度第1回東久留米市総合教育会議

令和2年11月7日午後2時00分開会

市役所7階 701会議室

第1部

基調講演

演題 「8050問題とは何か-親同居未婚者の未来」

講師 中央大学文学部教授 家族社会学者 山田昌弘氏

第2部

討論会

テーマ 「東久留米市の8050問題」

司会 中央大学文学部教授 山田昌弘氏

パネリスト 並木克巳市長、園田善雄教育長、尾関謙一郎委員、細田初雄委員、
宮下英雄委員、馬場そわか委員

出席者（6人）

市	長	並木克巳
教	育	長
委	員	園田喜雄
(教育長職務代理者)		尾関謙一郎
委	員	細田初雄
委	員	宮下英雄
委	員	馬場そわか

東久留米市総合教育会議運営要綱第9の規定に基づき出席を要求した者の職氏名

副	市	長	西	村	幸	高
企	画	経	営	室	長	土
企	画	調	整	課	長	道
福	祉	保	健	部	長	小
教	育	部	長	森	山	義
指	導	室	長	椿	田	克
教	育	総	務	課	長	栗
学	務	課	長	白	土	和
生	涯	学	習	課	長	板
図	書	館	長	佐	藤	貴
主	幹	・	統	括	指	導
						今
						野
						稔
						恵

事務局職員出席者

教育総務課庶務係長 鳥越 富貴

傍聴者 3人

◎開会及び開議の宣告

(開会 午後2時00分)

○道辻企画調整課長 ただ今から「令和2年度第1回東久留米市総合教育会議」を開催します。私は本日の司会を務めさせていただきます、企画調整課長の道辻です。よろしくお願いいたします。

さて、「総合教育会議」という名称を初めてお聞きになれる方もおいでかと思えます。「総合教育会議」は「議会ではなく、教育委員会でもなく」、市長と教育委員会が東久留米市の教育的課題について情報を共有し、議論し、本市の教育水準の向上を図るために行われる会議です。「東久留米市総合教育会議」は、平成27年5月に1回目を開催して以来、今回で14回目となります。

なお、これまでの総合教育会議では傍聴の許可後に皆様にお入りいただきましたが、本日は事前に教育委員会の承認を得ています。傍聴に当たりましては教育委員会の傍聴人規則に準じていただきますが、動画撮影及び録音についてはご遠慮いただきますようお願いいたします。

また、座席につきましては「密」を避けるために間隔を空けていること、空気の入れ替えのために扉を開けての開催とさせていただきます。本日の会議は2時間程度を予定していますので、傍聴者の皆様におかれましてはマスクの着用をお願いします。

それでは山田先生のご紹介を森山教育部長からお願いします。

第1部

基調講演

○演 題 「8050問題とは何か-親同居未婚者の未来」

○講 師 中央大学文学部教授 家族社会学者 山田昌弘 氏

○森山教育部長 教育部長の森山です。14回目となるこの会議は名称もこれまでと異なり、「市制施行50周年記念事業」という冠が付いています。今回はこの記念すべき回となりますので、新たな試みとして2部構成とし、初めに、中央大学文学部教授の山田昌弘先生に専門分野である社会学の視点から、これからの日本を必ず覆うであろう課題、東久留米市においても決して遠いまちの問題で済ませることができない課題を、基調講演の中で読み解いていただきます。

演題は「8050問題とは何か-親同居未婚者の未来」についてです。続いて、山田先生、市長、教育委員、教育長により、基調講演をもとに「東久留米市の8050問題」をテーマに、意見交換会を行っていただきます。

第1部の開会に先立ち、山田先生のご紹介をさせていただきます。

詳しくは山田先生にご用意いただきました基調講演の資料や、お配りしている次第などをご覧いただきたいと思います。山田先生とえば、何といても時の話題をさらった「パラサイト・シングル」というネーミングの生みの親でいらっしゃる方が有名ですし、最近では「〇〇(マルマル)活」という言葉がはやりましたが、「婚活」という言葉も山田先生が考えられたネーミングです。山田先生は社会学を基盤に私た

ちが関心を持ちやすい、入っていきやすいところから、社会現象について様々な分野の調査結果を分析して読み解かれ数値により実証されますので、説得力のあるお話が伺えると思います。

本日は、会場の設営の関係でパワーポイントが使えず、山田先生にはご迷惑をおかけしまして申し訳ございません。会場においでの皆様には資料をお配りするということで、山田先生のご容赦をいただきました。

それでは、山田先生、よろしく申し上げます。

(山田先生登壇／基調講演)

こんにちは。本日はお招きいただきましてありがとうございます。中央大学の山田と申します。よろしく申し上げます。人前でお話するのは随分久しぶりでして、最後に人前で講演したのは今年の2月ぐらいです。8カ月ぶりに講演ができるようになってうれしく思っています。

まだまだ新型コロナウイルス感染症が収まりませんので、皆様におかれましてはご健康に気をつけてくださるようお願い申し上げます。

よくよく考えてみましたら、40年前になりますが、私が東大の大学院に行っている時に、稲葉三千男先生のゼミをとったことがあります。その後、稲葉先生はすぐに退官なさり、東久留米市長になられたことを思い出しました。かなり前にお亡くなりになったと思いますが、ここにいるのもそういうご縁があるのでしょうか。

稲葉先生はなかなか太っ腹な先生でして、ゼミを早く終えてみんなでお昼を食べていたのですが、いつも奢っていただくというのが毎回でしたので、稲葉先生の授業がとても楽しみでした。

それでは、資料1枚ずつめくりながら話を聞いていただければと思います。

今日は「8050問題」がテーマです。3ページをご覧ください。「8050問題」とは何かと言いますと、80歳前後の親と50歳前後の独身の子どもが同居する世帯の問題をそう言っています。「50歳前後の独身の子ども」といっても本当に引きこもって外に出てこない人、アルバイトしている人もいれば正社員の人もあるという、実はその在り方は多様です。今はまだ多くの問題は出てきていません。何とか人並みの生活ができていますからです。親としては、子どもが外で働いていなくても介護や家の手伝いはしてくれるから便利に使えますし、子どもにしても、自宅、実家があるので生活費はあまりかからずに生活ができています。しかし、将来どうなるかについては親も子どももすごく不安な気持ちを持っています。

私は東京都社会福祉審議会委員をかなり長く務めていますので、この問題についてはそこでもいろいろ指摘し続けています。その委員の方からも、「最近身近でそういう人がいて、どうしたらいいかとよく相談を受ける」という発言が聞かれるようになりました。

現実には引きこもりにある方が増えてきていますので、そういう状況にある方々が将

来にわたって生活できる手当を創設したり、さらには、去年、東京都社会福祉審議会の報告書でその点も多少指摘されていますが、孤立しないで地域の中で暮らしていけるという両方の手だてが必要だと思っています。

「人は自分の見たいものしか見ない」というジュリアス・シーザーの格言があります。私が社会学を学ぶ時に最初に言われたのは、稲葉先生に言われたわけではないのですが、「とにかく現実をありのままに見るのが社会学の精神だ」と言うことです。偏見や常識を脇に置いて現実を記述し、分析し、原因を見つけ、未来を予測するというのが社会学の精神です。「社会学」とは、あまり人が見たくもないと思っている社会の側面を見せてしまう学問です。だから今日お話しすることは「本当はあまり見たくも聞きたくもなかった」ということになるかもしれませんが、現実には起こっていることですので、ぜひ参考にいただければと思います。

学生に「見たくないから見ないようにしているものを挙げなさい」という宿題を出すと、一番多いのは体重計です。次に多いのは、好きなタレントが事件を起こした時のニュースなどです。そういう中で、「化粧をしていない時の自分の顔」が出てきました。現在、東京にある大学のほとんどの授業は対面ではなくリモートでやっていますが、私の少人数のゼミでは画面に全員を一人ずつ映してもらっています。そうしたら一人の女子学生が「今日は化粧していないのでカメラはオフでいいですか。」と言ってきました。化粧していない自分の顔というものも見たくないものなんだなと思いました。

さて、社会にはやはり見なければいけないものはいろいろあります。かつて、私は非正規雇用者、いわゆるフリーターの調査をしていて、ある地方に行きました。その中で、30歳ぐらいの女性でパラサイト・シングルというか、親と同居していた非正規の方に「将来はどうしたいですか」と聞くと、「結婚して子どもを育てて、子どもが大きくなったら趣味でもしたい」と答えたのです。私は社会学者なのでつい聞きました。「もし結婚しなかった場合はどうしますか」と。そしたら答えに詰まられてしまいました。「婚約者はいるのですか」とさらに聞いたところ、ますます「うーん」という感じになってしまったのです。その方はその後どうなったかは分かりません。

できれば結婚してそういう生活を夢見ることはもちろん構いませんが、今の社会は全員が結婚できる社会ではなくなってきましたので、「結婚したらこういう幸せな生活を送る」「では結婚しなかったらこういう幸せな生活を送る」という両面作戦でいかななくてはならないのです。しかし、「将来こうなる」ことを見たくないのが人間なのだと思います。私だってそうです。しかし、繰り返しますが、今はそういうものも見なければいけない時代になっているということです。

「先生の授業の後にはみんな暗い顔になります」と、私は学生によく言われます。

「君たち世代は結婚確率75%、離婚確率35%だ」と話していますので。「今のままでいくと君たちのうち4人に1人は一生結婚しない。結婚した3人のうち1人は1回離婚する。何回もする人もいるが1回はするよ」と。今の学生は多くが結婚したご両親に育てられて生活しています。両親が結婚できたから自分が結婚できないわけは

ないと思う。しかし、そこがもはや時代が違うんです。さらに学生に話を聞いてみると、「親戚のおじさんやおばさんで結婚していない40、50代の人がいる」学生も結構います。もちろん半数は結婚しても離婚していませんが、離婚する半数の方に入ることになるかもしれない。そうなったときのことを考えなさいと教えています。

5ページをご覧ください。「今日、伝えたいこと」というのは、今の若者や中年をめぐる家族や雇用の状況を「ありのまま」に見るとどうなっているのかということです。ここからは8050問題の背景に潜む現代社会の在り方、8050問題はどのように生まれてきたのかということをお話ししていきます。

7ページから8ページをご覧ください。「二つの格言」とありますが、格言なのか諺なのか分かりません。私が『希望格差社会「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』を書いた時には、「希望は努力が報われると感じる時に生じ、努力が無駄になると思えば絶望が生じる」を引用しました。努力してそれが結果につながり、お金という意味ではありませんが、いい評価となって返ってくると思えば「希望」が生まれる。しかし、努力しても努力しなくても無駄だと思ってしまうと「絶望」が生じてくるということです。

ジグムント・フロイトは有名な精神分析学者ですが、「人が上手くできなくてはならないことは『働くこと』と『愛すること』」と言っています。若い人にとっても中高年の人も含めてですが、今は「働くこと」「愛すること」が上手くいなくなってきました。新卒で正社員になれない。必ずしも正社員になることが目的ではありませんが、非正規社員、フリーターやアルバイトしている人たちの調査をすると、そこになかなか希望がないのです。もちろんある程度のお金はもらえます。では、アルバイトを一生懸命やって将来が報われるかということ、報われる人も多少はいるかもしれませんが、正社員に比べれば報われることは少ないし、一生懸命やっても契約期間が終了、さよならとなることもありますね。なかなか仕事で報われない人が多くなってきました。

さらに、「愛すること」となると、結婚したくてもできない人が激増しています。

コロナ禍ではありますが、今、国勢調査が行われています。今年の国勢調査は大丈夫なのか、正確にデータが出るのかなと少し心配に思ったことがあります。というのは10月3日になっても、私の所に調査票が届かなかったのです。慌てて連絡したら、「すみません。車がないので住んでいないと思いました」ということでした。みんなが車を持っているわけではないだろうと思いましたが、そういうことでした。

前回の国勢調査によると、5年前の未婚率は30代前半で男性47.1%、女性34.4%です。5年経っていますがこの数字はそれほど変わらないと思います。30代前半の男性の2人に1人、女性は3人に1人が結婚していないという状況です。先ほど控室で「市役所でも結婚していない人が増えている」と聞いたのですが、正規公務員の方は結婚率が結構高いはずなんです。ということは、世の中にはもっと、「結婚したいけれども結婚していない30代前半の方」がかなりいるということです。今の80歳ぐらいの方の未婚率は大体2%ぐらいです。「2%」だと「本人がした

くなかったんだな」「何か問題があったのかな」ぐらいに思われますが、これが30%や40%になってくると、「未婚であることは本人の責任である」とは言い難い状況にあります。これが社会学的な見方になります。本人にも何かしらの責任があるとか、本人がしたくないという場合もあります。しかしそれ以上に、「社会が変化してなかなか結婚しにくくなっている世の中に置かれている」ということを私は言いたいのです。

9ページです。私は「就活」に擬（なぞら）えて、「婚活」という言葉をつくりました。昔は意識しなくても就職も結婚もできました。ちょうど今の学生の親がバブル期の就職難の時期に当たっています。昔は自然に出会ったり、周りから見合い相手を紹介されるなどしてどんどん結婚していきました。「就活」も学校を卒業すれば自動的に正社員になりました。今年で35年間大学で教えていますが、かつてのバブル期の学生たちの就職はどうだったかと言いますと、とても楽な時代でした、「会社訪問に行ったら幾らくれました」という時代がありました。今はそうはいきませんが。

「希望格差社会」という言葉をつくった時は、「努力してもなかなか報われない人が『必ず』出てきてしまう社会」になり始めたころです。

全員が正社員で就職できるわけではない。増えてきたとは言えまだまだ大卒の人は6割ぐらい、東京だともう少し多いですが日本全国でも6割ぐらいでして、高卒の正社員の就職先は本当に細ってきています。サービス業、アルバイト、特に、高卒女性の方だと正社員の仕事に就ける人は少なくなってきました。「じゃあ、結婚すればいいじゃない」と言っても、全員が結婚し、離婚しないでいられる社会でもなくなってきました。若い人はもう努力しなければ、就職も結婚もできません。

学生に話を聞くと、最近は公務員になるのも大変になってきていて、入学した1年生や2年生の時から公務員になるための塾に通っています。かつての「大学の授業を聞いていて、就職のための試験勉強を少しすれば受かった」というレベルではないんですね。一昨年、大学近くの市役所に合格した学生に聞いたら、一次試験が終わり二次試験対策で模擬面接を受けたと言っていました。それも何々市用とか、国家公務員だったら何々省庁用の面接があり、面接官が「去年までのデータによるとこういうことを聞かれるからこう話すように」という指導があるそうです。その学生は無事に合格しました。

しかし、そこまでして合格できる人はいいますが、全員が合格できるわけではありません。最近で一番困ったのは、「ブラック企業とネット上で言われている企業しか内定をもらえなかったどうしたらいいか」というもので、私の周りにはいる経済評論家や企業の重役等に聞いてみたところ、答えは予想どおり半々でした。その学生は何かブラック企業ではないと言われているところに就職しました。

いよいよ、努力しても就職も結婚できるとは限らない社会に今の若者はさらされているということを、先ず皆さんの頭に入れておいていただきたいと思います。

11 ページです。将来の職業生活や家族生活に見通しがつかなくない社会になってきました。「就活」や「婚活」に一生懸命にならざるを得ないように追い込まれています。「就職」はレベルを変えればいいですが、「結婚」は相手が誰でもいいわけにはいきませんね。かつて「101回目のプロポーズ」というドラマがありましたが、私は、100回以上お見合いをして断られ続け、40歳になって結婚した男性のインタビューをしたことがあります。「お相手のどこがよかったですか」と聞いたら、「僕を選んでくれたということだけでよかったです」と。でも実に不思議に思えました。インタビューした時はごく普通の方で、職業も地方の正規教員でしたから。

「就活」や「婚活」をしている人は「一体どこまですればいいのか」と悩んでいると思います。努力が無駄になるかも知れないと。これまでは、大学までは努力すれば何となく報われるような社会に生きてきたということがあると思います。成績が上れば望む学校に入れることはありますから、あまり努力が無駄になった経験がないかもしれません。

今の若い人は努力が無駄になることは嫌います。「これをやって何か役に立ちますか」とよく聞かれます。長期的な見通しがあれば少し回り道してでも、今は直接役立たないかもしれないが将来役立つかもしれない教養を身につけておこうという気になるのかもしれませんが、「就活」に追い込まれるとそういう余裕がなくなってきました。1年生の時のオリエンテーションで、「就職に一番役に立つサークルは何か」と聞かれたことがあります。「入学したばかりじゃないか」と言いましたが、「無駄なことはしてはいけない」「役に立つことしかしてはいけない」と考えている学生が増えてきている気がします。これは本人のせいと言うよりも、社会がそう追い込んでしまっていることは否定できないと思います。

では、就職や結婚を諦めたら将来どうして暮らせればいいのか。こういう若者にどのように向き合っていっていいのかが、教育者である私も含めて、大人の課題だと思っています。

社会はどう変わってきたのか。それは1990年代後半から、社会の基本的な在り方が変わってきたようです。90年代後半から自殺急増や児童虐待、セクハラなど様々な問題が出てきました。その結果、8050、7040とも言いますが、さらに、NHKの番組では「アラフォークライシス」という言葉を使って社会の変化を報道しています。現在45歳前後の人々がグローバル化社会の影響を受けた最初の世代です。

「どうしてこういう状況になってしまったのか」と切実に思っているのが、50歳を目前にしている方々だと思います。今でこそようやく8050問題、就職氷河期世代問題が話題になりましたが、彼らが若い20代、30代のころは全く根本的な対応策が取られないままここまで問題が引きずられてきてしまったのです。つまり、当時の多くの若者は、当時の50代、60代世代と同じように普通にしていれば正社員になって、女性だったら普通にしていれば正社員と結婚して悠々たる生活を送られるはずだったのにと。そういう人たちもかなりいますが、そうではない人たちが増え始めたのがちょうど今の45歳前後の世代になります。

15ページのグラフは「年齢別自殺者数の推移」を示したものです。1990年代にどう変わったかが分かります。今社会問題になっていることは、実は90年ぐらいから増え始めていました。生活保護にしても離婚にしても非正規雇用の割合も、90年代を通じてどんどん増えてきました。自殺者は減少してきていますが、90年代後半、アジア金融危機後に自殺者が増えたのはまさに中高年男性だったわけです。1997年のアジア金融危機から山一証券廃業、拓銀倒産、長銀倒産と続きました。努力すれば報われると思って一生懸命働いていたが突然会社がなくなってしまい、今までやってきた努力はどうだったのかと無念に思って、自ら命を絶たれた方がそのころ増えています。幸いなことにその後は中高年男性の自殺は減りぎみです。

最近のコロナ禍では、若い女性の自殺がここ数カ月間に増え始めています。コロナ禍によって、非正規雇用率が高い女性が相当数、仕事を失っています。男性に比べて若い女性の失業率が高まりその中で若い女性の自殺率が高まってきているということは、「非正規でも頑張ろう」と思っていたがそれさえも無くなってしまったところで絶望が生じているのかもしれませんが。傍聴席には市の男女平等推進市民会議会長の名取さんがいらっしゃいます。私も国の男女共同参画の委員も務めていますが、コロナ禍によって立場が弱くなった女性の対策については多くの場で話題にされています。

21ページです。戦前は一家総出で農業社会として働いていました。戦後、工業社会になり、男は仕事、女は家事という形で上手くいっていました。1990年代以降は情報化やグローバル化が進み多様な雇用が生まれ、多様な家族形態が出てきましたが、それに伴う社会問題に対して、われわれは対応できていないのだと思います。戦後の性役割分業が上手くいったのはみんなが学校卒業後に正社員になれて、男性は収入が安定して上昇していき、女性は希望すれば正社員と結婚できていたからです。公務員も含みます。ほとんどの若者が「夫は仕事、妻は家事で、豊かな生活をつくる」という見通しが持てたことがみんなの「希望」となっていて、それが1990年半ばくらいまでは続いていたのです。

24ページのパイプラインシステムですが、パイプラインの中に乗っていけば、真面目に学校を卒業しさえすれば、男性だったら正社員にみんながたどり着き、そこで結婚して生活ができました。90年ぐらいまではこういうことができたということです。25ページにその説明があります。「就活」という言葉ができたのは1990年代半ばでして、それまでは「就活」という言葉はありませんでした。つまり「就活」する人はいなかったということです。

27ページです。夫の収入の伸びが鈍ってくるのがオイルショック以降で、そこからだんだんと結婚がしにくくなってきました。つまり、「親と同居したまま男性の収入が高くなるまで待つ」という女性が増えてきたのです。私の言う「パラサイト・シングル」がこのころ発生し、まさに1975年生まれぐらいからこの影響を受けてきたわけです。結婚して親以上の生活をしたいがなかなか収入の見通しが立たないので、親と同居していろいろな意味で待ち続けるという人たちがこのころ出てきたわけです。

しかし、景気がまた上向いてそのまま結婚すれば、「少し結婚するのが遅かった

ね」で済みましたが、そうはいかなくなった状況が30ページにあります。

世界の流れが工業経済からサービス業経済に替わり職の二極化が進行してきます。男女雇用機会均等法ができて女性も活躍できる職に就けるようになったことは、もちろんプラスです。男性の雇用は不安定になってきましたが、なんやかんや言いながらも実は1990年までは未婚女性はみんな正社員として就職できていました。未婚女性が正社員として就職できてからはほとんどの人が結婚しましたが、結婚しなくてもその正社員の仕事を続けていれば何とかなっていました。しかし、1990年代以降になると、未婚女性の正社員としての就職が難しくなってきました。

32ページです。企業は誰でもできる仕事を正社員で雇わなくなり、非正規雇用になる若者が増大しました。日本は新卒一括採用慣行があるので一度非正規になるとなかなか抜け出せません。非正規で幾ら一生懸命働いても多少時給が上がるくらいです。ある大企業に講演に行った時に「うちは期間工の正社員正規雇用登用制度があります。何千人いる期間工のうち年に数人を正社員に登用しています」と。しかしそれでは「希望」にはならないですね。2人に1人ぐらいだったら頑張ろうかと思いますが、何千人いるうちの数人がなれるというのでは。それに希望を託してやってみようという人はいるでしょうか。しかし、地方に行くと実はそういう方も結構いて、あるコンビニに働く男性に「将来の夢は何ですか」と聞いたら、「今はアルバイトだけど頑張ったら契約社員にしてくれると言われて」と。地方だと契約社員でも結構いい収入が得られ生活できるので、それが希望ですという方がいますが、実際にはなかなか全員がそのルートに乗れていないのです。

ということで33ページにあるように、パイプラインに漏れが生じてきました。「かなりの人は正社員になれるが全員になれるわけではない」という社会になってきたわけです。34ページです。学校の卒業が定職につける保証ではなくなりました。高校を出ても安定した収入の正社員になれる人が増え、大学を出ても必ずしもホワイトカラーや技術専門職に全員が就けるわけでもなくなってきました。その格差がどんどん広がってきたのです。さらに、未婚率が1970年以降はどんどん増えてきて、2015年段階で男性はもう23.4%が未婚、女性も14.1%。今年の国勢調査が正確に集計されれば、今年の50歳の男性の4人に1人は結婚していない状況にあるという計算になっています。

36ページです。男性一人の収入では妻子の豊かな生活を支える見通しが立ちにくくなっています。進んでいるとはいえ歩みがのろいので共働き社会にはなかなかならず、固定的役割分担意識やそれを前提とした制度にこだわる男性と女性とでは結婚しにくいまま留まってしまっているのです。

39ページ以降の「格差社会の将来」に入ります。

将来どうなっていくのか、どのようにしなくてはいけないかという話になります。定職に就けなかったり、家族が形成できないリスクがどんどん高まっています。大卒の3分の1、高卒の2分の1くらいが昔のような定職には就けない。みんなが昔

のように安定した家族生活は送れない状況にあります。従来型の仕事に就けたり、家族を形成している人は、今までどおり上手くいったと言えるかもしれませんが、そうできない人たちが結構な数で存在していくのです。努力してもなかなか報われないという状況が出てきてしまうことになります。

42ページです。そうすると二つの反応が出てきます。政治的な保守、革新という意味ではなく、何とか今までどおりの職に就きたい、今までどおりに正社員と結婚したいという考えのままでいるか、そうではなく、夢の世界に救いを求める人に分かれていきそうだということです。

しかし、44ページにあるように、正社員の椅子の数がそんなに増えるわけではありません。それならば結婚すればいいだろうということで、このコロナ禍によって失業した女性たちが結婚情報サービスに相当数加入したと言われていています。しかし、逆に言えば、女性が結婚したいと言っても自分の収入はありませんから、相当の収入のある男性と結婚しなければ将来の生活が成り立ちません。ますます少数の安定した収入を持つ男性の奪い合いになっている状況があると聞いています。45ページでは、何やかんや言っても、収入が高い男性を求める女性がまだまだ多いということを書いています。46ページはすごく古い話です。今はトランプ大統領がどうなるのかに関心が集まっていますが、クリントン元大統領の20年前の演説から私はよく引用しています。過去は過去なのに、過去の姿をあまりに美化しすぎていくと未来を失ってしまうと。ただし、未来は明るいとは限らないから過去にしがみつきたくなる気持ちも分からなくもない。全男性が終身雇用の正社員になったり、全女性が正社員と結婚することはもう無理だが、自分はそうなれるかもしれないから努力せざるを得ない。

これもいろいろなところで聞かれることですが、結婚相談所に行くと、女性は最初「年収1,000万円以上でないだめだ」と言う人が多いそうです。既婚者でさえ年収1,000万円以上の方がそんなにいるわけでもないのに、若い、適齢期の結婚していない男性で年収1,000万円の男性なんてましてそんなにいるわけありませんが、そう説明しても「でも、いるでしょう」と言うのです。人間とはそういうものでして、周りにそういう例があると自分もできるかもしれないと思ってしまう。婚活業界では「加藤茶効果」「加藤茶現象」という有名な現象があって、加藤茶さんが30何歳年下の若い女性と彼が60代で結婚した時に、結婚相談所には「加藤茶にできたのだから俺にできないわけではない。30年下を紹介しろ」と押し付けてきたと、結婚相談所から聞きました。

実際に周りにそういう人がいるからでしょうが、なかなか合理的には考えられないのです。自分は宝くじに当たると思って宝くじを買うわけです。宝くじだったら何百円、何千円で済みますが、結婚というリアルな世界ではそうはいきません。希望が持てなくて、虚構の世界と言いますか、ゲーム等のバーチャルな世界に救いを求める人が増えているのです。48ページ、49ページです。ゲームやパチンコは頑張ればレベルが上がりますから、ゲーム業界はそういうところを突いていると思います。何とかクリアできるものを順番にクリアしていく。本当はそれは現実の仕事でクリアしていき、次のレベルに行けばいいのですが、仕事では上手くいかないからゲームやパチ

ンコにはまる。パチンコだって1週間に一度ぐらいは大当たりが出て報われるという高揚感がありますが、現実の世界ではなかなか報われないとそちらに行ってしまうのです。日本全国でキャバクラは5万5,000店あります。5万5,000店ということはそこで働いている人が1店舗20人いるとして、100万人ぐらいが働いていることとなります。逆に言えば、それだけ需要があるということですね、リアルな世界ではありませんが。

豊かなコミュニケーションの定義は、「自分が一生懸命に話をしていることを相手が喜んで聞いてくれるという親密な体験」です。リアルな恋人同士とか夫婦同士とか家族同士でそういうことができればいいのですが、そういう相手がいないのでキャバクラに行って、お金を払って自分の話を相手に真剣に聞いてもらって満足する。一昨年、ドイツの放送局からインタビューの依頼があって、キャバクラを説明する機会がありました。もちろん通訳が入っていましたが、説明することがすごく難しかったです。「何でお金を払って話をするの」「日本は独身が多いのだったらいい人を誘って一緒にお酒を飲めばいいのに」と言われました。これは日本に特有な現象なんですね。しかし、それが救いである社会になってしまっているとも言えます。

51ページです。実は若い人の社会に対する満足度は低くないのです。データは4年前のものなので少し古いですが、18歳から29歳までの満足度はものすごく高いです。一番満足度の低いのは40代、50代の男性です。「現実はとりあえず生活が可能で、バーチャルなところで努力が報われればいい」という感じですが、しかしそこすらも、なかなか叶わない人が多くなってきていると言えます。

53ページです。35歳から44歳までの国勢調査の状況です。まだまだ既婚者がメジャーですが、既婚者は男性の場合は63.5%、未婚者が32.5%という状況で、未婚者や離死別者が増えている状況にあります。54ページにあるように、2015年の段階で中年親同居未婚者が308万人、45歳から54歳までの親同居未婚者は日本全国で157万人です。男性は経済的不安定だから結婚せずに親元に留まり、女性はもともと差別があって、正社員になれる数が少ないから親元にとどまっているのです。

親の年金に依存する中高年独身者が増え、親と自分の収入を合わせてやっと生活できている「8050」「7040」の人たちが増えています。

かつては高齢者虐待問題がありました。今は息子の介護がどんどん増えています。どう介護していいか分からないという状況が多く、虐待と言われたこともあります。叩くとかぶつということは少なく、「どのように介護していいのかわからないので結果的に放置してしまう」という状況が多いと聞いています。その数がどんどん増えていることを示したのが56ページの図です。

58ページです。おそらく世界的に前例がない事態が出現しています。近代社会では目立たなかったことが、今や少数とは言えなくなり始めている。無縁死、孤立死が年3万件程度あると言われていています。80歳の生涯未婚率は3%なので大体それに相

当りますが、家族がいなくて高齢を迎える人は2040年には年30万人以上に増えると思われています。

ではどうしたらいいのか。今は社会の変化によってさまざまな生きづらさが出てきています。「就活」がづらいと言ってもやめろと言えないし、正社員にならなくても大丈夫だよとも言えません。ゲームだけを楽しんでいる人に、将来そのままいっても大丈夫だよとも言えません。私は読売新聞の『人生案内』の回答者を10年以上続けていますが、本人からというよりも親からの相談がすごく増えています。息子や娘がなかなか正社員になれない、どうしたらいいのか。時には孫の相談もあります。さらに若い人からは、「夢を追いたいけどそんなことをしたらだめですよ」と自己規制をかけています。やりたいことはあるがそんなことを追うよりも、とにかく相談者の親は息子や娘に公務員になれと。うちの学生もそうなんです。お父さんやお母さんからは「公務員になってくれ」と言われると。しかし、「努力が報われる仕事が公務員だけになる社会」というのもまた困った社会だと思います。

去年の出生数は86万人、今年はもう少し少なくなって、来年の出生数は80万人を切ると思われます。大学の入学定員が60万人以上ですので、来年生まれた人は大学入学が楽になるというよりも、20年後には大学の先生が大量に失業してしまうのではないかと思います。20年後の子どもは受験競争がなくて楽でいいねと言っているのか、その後、その人たちにかかる負担が多くなって果たして大丈夫なのかと思います。

将来の見通しがなければ結婚したり子供を産むという決断はできませんので、コロナ禍によってちょっと控えておこうが本当の「ちょっと」だったらいいのですが、これが長引くとどうなるか。コロナ禍によって、不利な人がますます不利になっているような状況があると思います。

64ページです。「処方箋はあるのか」に入ります。

正社員になれば安全、そうでなければ不安定という構造を変え、正社員・非正規社員・自営業・フリーランス等の格差を改善し、再チャレンジできる環境をつくったり、自由に自分の能力を開花させる機会を持てる社会をつくっていかねばいけないと思います。今の社会保障は正社員と主婦が標準である社会です。そういう構造を変えていくことが必要です。一人では生活できないが共働きなら生活できる。では共働きをする制度がしっかり整っているかという、まだまだ日本は不十分なのです。

さらに、中高年の婚活支援も必要だと考えています。婚活支援というと少子化対策と聞こえがちですが、一人で暮らすよりも二人で暮らした方が絶対に効率的ですし、安全なので、私は中高年の婚活支援を東久留米市からぜひ始めていただきたいと思っています。「孤立するぐらいだったら二人で暮らした方がいいよね」というぐらいの気持ちからスタートできることを推進していきたいと思っています。いろいろな家族形態であっても、ある程度の生活やケアを可能にできますから。

これまでは若者の孤立を「引きこもり」と言っていたのですが、今は「引きこも

り」が中高年化しています。中高年の一人暮らし男性はとても孤立しやすいので、そういう人たちの居場所づくりをしていく必要があります。

個人的な処方箋としては、とにかく「ステップアップできる仕事を見つけること」が重要であると考えています。68ページにあります。女性には高収入の男性と結婚できればオーケーという考えは捨ててもらって、自分でもある程度稼ぐことを考えていただきたいと思います。男性も黙っていれば結婚できるというのはもはや無理で、「家事や育児を半分するから」ぐらいのスタンスでいることが必要だと思っています。

教育者として長年学生に教えていますが、30年前に先生をやっていてよかったなと思うのは、学生たちに「何でもチャレンジしてみなさい」「1年間ぐらい世界を見てきてもいいよ」と言えたんです。しかし、今そう言ったら「1年後に就職が厳しくなったらどうしたらいいんですか」と言われそうで、「夢を追え」とも言いにくくなっています。かといって「夢は諦めて就活を一生懸命頑張れ」とも言いにくいのです。

ということで、結局はそういう場面において、自分で考え、判断し、乗り切れる力をつけさせる必要があるということです。

いつも学生に言っていることがあります。あり得ないような幸せを追うのではなく、現実には何かあったときに乗り越えられる力を身につけること、また、つけさせることが教育だということで、自分にも日々言い聞かせています。

以上で講演を終わらせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

○道辻企画調整課長 ありがとうございました。第2部の討論会を始める前に休憩をとりたいと思います。短くて恐縮ですが3時15分までの5分間の休憩でお願いします。

(休憩)

第2部

○討論会

テーマ 「東久留米市の8050問題」

司会 中央大学文学部教授 山田昌弘氏

パネリスト 並木克巳市長、園田善雄教育長、尾関謙一郎委員、細田初雄委員、宮下英雄委員、馬場そわか委員

○道辻企画調整課長 ただ今から第2部の討論会を始めます。ここからは山田先生に司会をお願いします。よろしくお願いします。

○山田先生 「東久留米市総合教育会議」では、講演会と討論会と2部構成で行うのは初めてだと聞いています。私はあまり司会に慣れていませんので不慣れな点をご容赦ください。さて、今日は皆さんとお会いし、教育現場の声を聞くのも楽しみにしていました。

それではまず並木市長から一言ずつお願いします。

○並木市長 こんにちは。山田先生、本日は貴重な講演を聞かせていただきました。現実から目を背けないようにということでした。気が重くなるような内容もありました

が、だからこそチャレンジのしがいもあると感じました。

今回の総合教育会議の議題については、教育委員会からは去年の10月ぐらいに話を聞いていましたが、まさか1年後に、新型コロナウイルス感染症が世界でこれだけ蔓延するとは思ってもみませんでした。学校では長きにわたって休業しましたので、今では授業の追い込みということで土曜日にも授業をし、また、一日のコマ数を工夫するなどの対応をとってもらっているところです。教育委員会には日ごろからコロナ対策に大変ご協力いただいています、本日もコロナ対策をしっかり行いながら進めさせていただきますのでご安心いただきたいと思います。

今年、東久留米市は市制施行50周年を迎えましたが、50周年の式典は執り行うことができなくなっています。しかし、今までに実施したことのない、記念の映像をつくり、全国に発信するなどのチャレンジをしています。多くの方にご覧いただければと思います。

基調講演に続く討論会のテーマですが、先生とご相談し「東久留米市の“8050問題”」とさせていただきました。「8050問題」は全国の自治体が抱えている問題であり、日本が抱える共通課題の縮図とも言えますので、本日は後者の視点を持ちながら、前者に軸足を置いた討論になっていければと思っています。

いわゆる「8050問題」は既に様々な課題となって表れてきています。この3月に開催されました第1回市議会定例会においては、「中高年の引きこもりに対する実効性ある支援と対策を求める意見書」が可決されていまして、市議会では政府に対し、中高年の引きこもりは本人やその家族だけの問題でなく、社会全体で受け止めるべき大変重要な課題と捉えるべきということを指摘されています。

本日ここにおいでいただいている方々の周りにも、関係者の方がいらっしゃるかもしれません。当事者の皆様にとっては、「ひとくくりで取り上げられるような簡単なことではない」ということは認識しています。個人的な事情を含むことですから、実は私も意見を言うのも非常に慎重に答えていく必要があると思うぐらい難しい案件です。一つ一つ言葉を選びながら議論させていただければと思っています。

さて、いつもの「総合教育会議」では私が司会を務めますが、今回は山田先生に司会をお願いしましたので、私も討論に集中させていただきたいと思います。短い時間ですが、東久留米市の抱える課題に幅広い年代が一緒に関心をもっていただきまして、課題を共有することが重要だと考えています。

なお、本日は、小堀福祉保健部長と指導室の今野統括指導主事に説明のために発言させていただきます。後ほどよろしく申し上げます。委員の皆さんもよろしく申し上げます。

○山田先生 ありがとうございます。園田教育長お願いします。

○園田教育長 こんにちは。教育長の園田です。教育長を拝命して3年目になります。先ほど山田先生のお話の中で、大学ではまだ Web 授業、リモートでやっておられると聞きました。本市においても3月から5月までの3か月間、小・中学校では休業しており、幸いにも6月から再開しましたが、幾つかの制限はかかっています。残念ながら修学旅行は中止をせざるを得なかったとか、様々な秋の学校行事も規模を縮小し

てやらざるを得なかったことなど一定の状況にはありますが、何とか学校教育を進めることができている。

山田先生からは参考になるお話を伺いました。時間の関係で十分にお話しできなかった分はこの討論会の中で存分にご披露いただければと思います。よろしくお願いします。

○山田先生 ありがとうございます。続いて尾関委員からお願いします。

○尾関教育委員 尾関です。この10月で教育委員の中では一番古株となり3期目です。総合教育会議には13回とも出席していますが、毎回異なるテーマの下、活発に意見交換が行われていると思います。今日は山田先生にお話しいただきましたので、それをもとに自分たちの考えを話していきたいと思っています。

私も大学でキャリア講座をもっていますので、リモートによる授業についてはとても差し迫った問題だと思っています。今日は本市独自の施策づくりに向けての意見交換ができればいいなと思っています。よろしくお願いします。

○山田先生 ありがとうございます。細田委員お願いします。

○細田教育委員 細田です。総合教育会議は市長や尾関委員と同じ回数を経験していますが、本日の会議は「市制施行50周年記念」の冠が付いた通常とは異なる大舞台なので、とても緊張しています。山田先生や市長の胸をお借りするぐらいの気持ちで、思ったことを発言していきたいと思っています。よろしくお願いします。

○山田先生 ありがとうございます。宮下委員お願いします。

○宮下教育委員 宮下です。山田先生のお話の中で「パラサイト・シングル」という言葉が何回か出ています。私もその言葉は存じていましたが、その言葉の生みの親である山田先生と今日このような形でお会いできるとは思っていませんでした。光栄の至りです。本日のお話の中にもありましたが、「8050問題」を考える時、「8050問題」があるとするならば、既に「7040問題」や「6030問題」もあるということも知っておく必要があると思います。この問題の対象となる層は大変ぶ厚いものです。日本人の寿命が延びていますので近いうちに「9060問題」も出てくるのではと思うと、日本のこれからの家族問題を考えるときにもものすごく重要な問題だと思います。

今日はその重要な問題に対して山田先生と一緒に果敢にアタックし、みんなで意見を出し合いながらリサーチできればと考えています。よろしくお願いします。

○山田先生 ありがとうございます。馬場委員お願いします。

○馬場教育委員 山田先生のお名前は、新聞の「人生案内」で何度か拝見していました。何人かいらっしゃる回答者の中で、山田先生は主に、恋愛・結婚・離婚、家庭・家族に係る相談に回答されていたと思います。今回の討論会のテーマは「家族」に直接関わることなので、先ほど市長も言われていましたが、講演を聞いて、シビアな問題にもきちんと目を向けていかなければいけないなと思いました。

また、この問題はあまりにも身近で現実を突きつけられる感じもしますので、発言するのがとても難しいと思っています。今日は委員として日頃感じていることを率直に述べさせていただければと思っています。よろしくお願いします。

○山田先生 ありがとうございます。市長、教育長をはじめ、委員の皆様は教育委員としてのご経験が十分おありですので、積極的なご発言を期待します。よろしくお願いします。

1 本市の8050問題～①大人の引きこもりについて

○山田先生 これまで家族の問題についてはあまり行政が立ち入れない、立ち入らないことになっていたと思います。しかし、結婚も含め家族の問題についても行政がいろいろな支援をしていかななくてはいけない機運が出てきました。

「引きこもり」問題もそうだと思います。以前のように「引きこもり」が少数だった時は個人の問題として扱うことでもよかったと思いますが、今や、何十万人が親同居で引きこもっているという事態になった以上、国をはじめとする行政として何らかの手を打たなくてはならないと思っています。

それでは、東久留米市の引きこもりの現状を先ずは知るために、小堀福祉保健部長からご説明いただければと思います。よろしくお願いします。

○小堀福祉保健部長 福祉保健部長の小堀です。福祉の現場から窺（うかが）えることをお話しさせていただきます。事前に改めて部内の関係部署に話を聞いてみますと、「8050問題」ととれる事案の相談は、やはり増えてきているという印象があるということでした。相談に来られるきっかけとしては、親世代あるいは子世代の当事者自らというケースのほか、日ごろから地域に目を配っていただいている民生・児童委員からの情報提供あるいは介護に関する悩みや心配事のほか、高齢者の健康や福祉、医療に関して様々な支援を行っている地域包括支援センターを通じてというケースが多くなっているということです。

この地域包括支援センターですが、本市では市域を東部、中部、西部の三つの圏域に分けまして、都合五つの窓口を設置しています。非常に見えづらいと言われる年齢を重ねてきてしまっている子世代の引きこもりですが、地域包括支援センターでは本来の高齢者に関する業務の傍らで、高齢者と同居するこうした子どもと出会うこととなります。引きこもる本人への介入よりも、むしろ親の介護をきっかけとした家族へのアプローチが可能になるという面を持っているわけです。

このように、地域包括支援センターが社会的孤立事例を発見しやすい立場にあるとはいえ、子ども側の支援を専門としている機関ではありません。それゆえに他機関による連携が必要であるという認識を持ちまして、それぞれの課がそれぞれの窓口において業務に当たっているところです。

○山田先生 ありがとうございます。

私は東京都の社会福祉審議会委員でもあります。地域包括支援センターへの期待とともに、ご説明のとおり対象が高齢者中心なので、全ての問題にアプローチできるわけではないと聞いています。しかし、この問題の対応には期待したい部署だと思っています。何かご意見はありますか。

○尾関教育委員 超高齢化、少子化という全国的な状況に加え、未婚の増加、さらにグローバル化も加わり外国人が増えるなど、市を構成する「市民」といっても実に多様

化してきています。国が積極的に関わらないと解決していかない問題だとは思いますが、市においてはそういう市民構成を念頭において施策を考えていくことになりまから、大変なことだと思います。その一部を切り取って、今日は「8050問題」を考えていくわけですが、本当に個人によるところが大きい問題だと感じています。

○山田先生 ありがとうございます。ほかにありますか。

○細田教育委員 不登校や引きこもりの問題はどの家庭や家族にも起こる可能性はあるわけですが、身近な家族や周囲にそういうことがないと自分の中では優先度の低い問題になってしまうと思います。しかし、自分のうちの隣が気がついたら何だか空き家になっているような、そうでないような状況になれば、もう他人事ではなくなります。

近い将来、町内にポツポツと空き家が目立つようになってくればみんなが関心を持つと思いますが、その時点を「8050問題」を考えるスタートラインとしては遅いのだと、山田先生のお話を聞いて分かりました。

1 本市の8050問題～②不登校と大人の引きこもりについて

○山田先生 ありがとうございます。

そうですね、「8050問題」の前には子ども時代からの問題もあると思います。

ではここで、配られている資料を見たいと思います。小・中学校の資料ですが一番下に不登校の発生状況が出ています。大多数が不登校になってしまったら学校が成り立ちませんので、パーセンテージからするとすごく多いわけではありませんが、徐々に不登校出現率は高まっていると思います。不登校といってもいろいろなタイプがありますから、ずっと家の中に引きこもって出てこない子どもから、学校には行けないが他の所には行けるという子どももいると思います。

では今野統括指導主事から資料の説明をお願いします。

○今野統括指導主事 初めに全国の不登校等の状況について触れておきます。10月22日に報道されていましてご存じの方も多いかと思いますが、文部科学省では全国の小・中学校、高等学校、特別支援学校を対象として、いじめや不登校などの状況調査を毎年行っています。昨年度の調査結果は10月22日の報道で公表されています。全国の不登校の児童・生徒はおよそ18万人、いじめの件数は初めて60万件を超え、暴力行為の件数も過去最多であったとのことでした。直近の5年間を見るといずれも小学校の増加率が高く、文部科学省は低年齢化が進んでいると見ています。

それでは資料の説明をします。この資料は今お話ししました文部科学省の調査に基づき、本市における令和元年度の生活指導上に係る暴力行為、いじめ、不登校の状況を取りまとめ、6月に教育委員会にて報告を行ったものです。不登校発生状況は一番下に示しています。本市では文部科学省の調査以外にも、市独自として毎月欠席の累積が10日以上の子供・生徒について学校が個別支援シートを作成することとなり、その提出内容から不登校の発生状況をまとめています。個別支援シートは児童・生徒の欠席日数や早退・遅刻した日数だけでなく、長期欠席になったきっかけや背景、登校復帰に向けて有用な情報を記載する様式となっています。

下里中学校では本市の指定を受け、「全ての生徒の居場所づくりを目指して」を研

究主題、「不登校対応と未然防止への取組」を副題として、不登校対策の研究を2年間、東京学芸大学教授小林先生にご指導をいただきながら行っています。その小林教授が複数の他県において不登校の児童・生徒の調査を実施したところ、10日以上欠席した児童・生徒がその後に長期欠席となる可能性が非常に高いという調査結果が得られたそうです。

そこで本市では不登校の児童・生徒の早期発見という観点から、個別支援シートに記載する毎月の欠席累積を10日以上と設定しています。資料の表やグラフからも分かるように、本市においても不登校の児童・生徒の数は年々増加しています。また、不登校状態から学校へ復帰した児童・生徒の数を見てみますと、小学校では令和元年度は平成30年度と比較すると10人増えました。学校復帰率で見ても7ポイント上昇して37.0%となり、改善傾向が見られました。中学校では学校復帰数が若干減少し、学校復帰率も9ポイント低下して19.0%でした。

このように、小学校では昨年度、不登校傾向を早期に発見し対応したことの成果が見られました。不登校対策は不登校傾向の早期発見と早期対応がとても重要であり、対応が長引くほど長期化、複雑化し、改善が非常に難しくなります。また、中学校では生徒が小学校段階から不登校の状態にあるなど、課題の解決が長期化するケースも少なくありません。各小・中学校では児童・生徒の学校への復帰に向けて、集団の中ではなく、個別であれば登校できる場合について、別室で対応することも行っています。ただし、特別に人材を確保しているわけではないので、別室での対応なら登校できそうだというお子さんがいる場合には、直接学校にご相談いただければと考えています。

先ほど触れました下里中学校では、研究を重ねる中で生徒たち一人ひとりの丁寧な見取りが大切であると考え、個別支援シートに基づき、それぞれの生徒の特性や対応方法について校内の全教職員で情報共有し、取組内容を検討する機会を定期的に設けております。また、生徒の居場所づくりの観点から、「よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート」を実施し、生徒の学校における居心地のよさを調査し、その結果を教育活動の充実に生かしたり、課題の改善につなげたりしています。

今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止の対策として、学校が年度当初に臨時休業することとなりました。教育委員会としましては、児童・生徒の心のケアが大切と考えていますので、下里中学校で実施している「よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート」を全小・中学校において夏季休業明けに実施しました。各小・中学校では現在、結果の分析を行い、今後どのように教育活動等を行っていくか対応しているところです。

今後も、全小・中学校において早期発見、早期解決を最優先に、児童・生徒の不登校問題の解決に取り組んでいきます。

○山田先生 ありがとうございます。

私も前任校が東京学芸大学なのですが、この問題にはすごく関心があります。東京都の研究指定校ということで、下里中学校が取り組みをしているということですね。

中学校での取り組みは義務教育までですが、それが将来につながることでありま

すので、不登校が増えているということはとても大きな問題の一つだと思っています。ほかにいかがでしょうか。

○馬場教育委員 私にはこの4月に高校生になった子どもと5歳の子どもがいます。学校も幼稚園も休業していましたし入学式もありませんでしたので、この休業期間中は本当にステイホームでした。不登校や大人のような、いわゆる引きこもりではありませんが、長い間ずっと家にいるということには変わりありませんでした。この未曾有の事態に対して、親も子も「当たり前が当たり前でない」ということを実体験したと思います。

先ほど山田先生もおっしゃっていましたが、「不登校」といっても「学校に行っていない」ことは共通していますが、外で遊んでいる子どもと家の中で過ごしている子どもとの、二通りあると思います。私は、今後、「家の中で過ごす不登校の子ども」が相当増えていくのではないかと心配しています。

なぜかという、保護者間の情報と私が実際に感じたことなのですが、この3カ月の間の学校の休みの時に、子どもたちは「天国だった」「こんな幸せな時間を初めてのんびり過ごした」「You Tube や SNS で学校に行かなくても世界が広がり友達もできたからもう学校に行かなくてもいい」と言っていました。「本を読んだり教科書を読むよりも、You Tube や SNS で好きなアイドルをずっと追いかけていたりする方が楽しい」と言っていました。きっと楽しいのでしょうね。実際、私たちも子どもたちとゆっくり過ごせ、好きなものを見たり話をしたりする時間がとても幸せに感じていたことは事実なので、そういう気持ちが分からないでもないのです。しかし、小さいうちからインターネット、SNS 7 バーチャルなゲームなどの世界と上手く付き合うことを覚えないととても怖いと同時に思った3カ月間でした。

これまで不登校の原因は主にいじめであったり、勉強についていけなかったり、先生が怖いとかのいろいろな理由があったと思いますが、今後はこれまで大人が考えていた理由とは違って、SNS やオンラインゲームなどから抜けられないという実態がものすごいスピードで広がっていくのではないかなと思いました。

○山田先生 ありがとうございます。

ロックダウンの最中の様子を学生に聞きましたら、二つに分かれていました。みんなでわいわいできなくてつまらないという学生もいれば、もうインターネットで十分楽しめるから大丈夫というタイプの学生がいることも改めて分かりました。You Tube が悪いというわけではありませんが、それだけになってしまうと大変なことになると思います。ほかにいかがですか。

○尾関教育委員 個人が尊重される時代です。「学校に行きたくなければ行かなくてもいい。居場所は人それぞれにある」という考え方がありますから、自宅にこもる不登校の子どもと、他の居場所を見つけた子どもがそれぞれいてもいいわけです。いろいろな事情がありますから。

しかし、本市でも子どもたちの「不登校」が増加傾向にあることは先の教育委員会の中でも報告を受けていますが、今の馬場委員の話を聞くと、不登校の理由をもっと深く掘り下げていく必要もありますし、そうすることで対策が講じられるのではない

かと思いました。

○山田先生 ありがとうございます。ほかにいかがですか。

○並木市長 山田先生に伺います。本日のテーマである「8050問題」の引きこもりにつながっているのではないかとということで、不登校の説明がありました。「引きこもり」は年齢や状況により異なると思いますが、自室にこもっている不登校が続くとそのまま青年、中高年の引きこもりに移行する可能性は高いのでしょうか。

○山田先生 はい。まだ詳しい調査研究はなされていないと思いますが、ある程度の関連はあると考えた方がいいと思います。もちろん、たまたまその学校が合わなかったという程度の不登校でしたら、別の学校に移ることで解決することもありますし、小学校の時の不登校でも別の学校には通えたというケースは多いと思います。

しかし「社会に絶望する」と言いますが、子どもであっても「社会に出ること（学校へ行くこと）への努力が報われない」「居場所がない」などと思ってしまうと、そのまま若年、中年の引きこもりに結びついていく可能性もかなりあると思います。

だからこそ逆に言えば、行政が努力のしがいがあるところではないかなと思います。

○並木市長 ありがとうございます。

○山田先生 さて、ここからは不登校の問題から対象が一挙に年齢の上昇した話に戻りたいと思います。

「8050問題」の解決にはいろいろな角度から、総合的に取り上げていく必要がありますが、今日は残念ながら時間がありません。この問題については、間接的になるかもしれませんが、今後、教育委員会としても見解を求められるときが来ると思います。まずは、教育委員さんがこの問題についてどのように感じておられるか、改めて伺いたいと思います。いかがでしょうか。

○細田教育委員 児童・生徒の保護者も「若者や中高年の引きこもり」の増加については社会的な大きな問題として知っていると思います。不登校が続いていた場合、既に何十年もそのままというご家庭もあると思います。親は身を削るような思いで、ひっそりと長い年月を過ごされているのでしょから、ご本人もそうですが、だんだん年老いていく親のことが心配です。

今年の4月、事務局から、65歳以上を対象とした、市で行った高齢者アンケートの調査結果を見せてもらいました。その中に「心配事や愚痴を聞いてくれる人は誰か」という、複数回答可の設問がありました。全体では配偶者が53.4%で一番多く、続いては友人が47%、その次は別居の子どもが34.7%と続き、同居の子どもは別居の子どもの半分の17.1%でした。いろいろな事情があると思いますが、この辺りにも、本市の年老いた親の複雑な心情が伺えると思います。

○山田先生 ありがとうございます。

福祉保健部長からご説明があったとおり、東久留米市では地域包括センター等で連携して動いているということです。中高年の引きこもりですとまだそれ自体が取り上げられることは少なく、介護問題等で逆に親の問題の方から引きこもり問題が発見されるということが多いと思います。ただし、この問題は社会制度に大きく関わってくる問題なので、市町村・国も含めて総合的な施策を打ち出してくれるといいのですが、

という状況にあると思います。ほかにいかがですか。

○宮下教育委員 不登校になったとしても、社会人になってから引きこもりにならない方もいますね。その逆に、不登校は経験しなかったが社会人になってからさまざまなストレスを抱えて引きこもりになる方もいるわけです。その原因をこれから追求していかなければいけないと私はいつも思います。

私の専門は理科、科学の分野です。ですから問題や新たな事象が発生するとその因果関係を帰納的・演繹的に考え、さらには実証性・再現性・客観性のある分析と解釈を追求するのが私の性分です。ですから、不登校や引きこもりの課題についても原因を分析し、対策を考えることがとても大切だと実感しています。私を含め、不登校や引きこもりにならなかった人たちは、たまたま、人間関係などに困難な状況がなかったのか。運がよかったのか。それとも運と言えるものはなかったけれど、困難があって、それを乗り越えてきたのかと……。

皆さんのご意見をずっと伺いながら考えていたのですが、科学の解決方法とは異なり、「これだ！」という手だてがまだ思いつきません。引きこもりの原因は人の数だけありますし、その対策も人の数だけあるからです。ですが、せっかくのこのような場ですので、解決の手だてを皆さんとともにリサーチしたいと願っています。

○山田先生 ありがとうございます。ほかにいかがですか。

○尾関教育委員 宮下委員のお話のとおり「引きこもり」にはいろいろな原因があって、それを乗り越える方法もいろいろあると思います。

私は新聞記者として20年間ぐらい勤務していた時は非常にストレスのある部署にいまして、それこそ昼夜を問わずハードな仕事をやってきました。しかし、そう思えるのは今振り返ってみればの話でして、その時は夢中になっていて、どのように解決してきたのかは渦中にいる時は分かるものではないと思います。いろいろなビジネス関係書には「こうすればストレスに順応できる」という特集もたくさんありますが、内容を見ると、ほとんどが当たり前のことを書いているように思います。

大人のいろいろな知恵や経験が積み重なってこそ、危機を避けられる、危機を乗り越える感覚が身についてくるのではないかと思います。その辺りに市ができることを探っていけば、今の若い人たちにプラスになるような、大人の知恵を授けていくという一つの方策になるのではないかと思います。

○山田先生 ありがとうございます。ほかにいかがですか。

○細田教育委員 この2カ月間余り、子どもたちは「ステイホーム」という家の中で過ごすことを経験したわけです。馬場委員の発言にもありましたが、天国と思う子どももいれば地獄と感じる子どももいたと思います。部活動をやっていれば練習や試合、演奏を披露したりする場がなくなったわけですから、学校再開となって子どもたちの行動が分かります。分岐点になるのかもしれませんが。

○山田先生 ありがとうございます。ほかにいかがですか。

○宮下教育委員 「不登校」から「引きこもり」につながることは少ないのかもしれませんが、最近のニュースで見ている事例には悲惨で胸が痛むようなものが多い気がします。「8050」の「50」側が児童期、青少年期から引きこもりが続いていたと

するならば、「80」側の親世代は我が子をほぼ50年間近く、同じ家の中で見続けてきたこととなります。すごい年月ですよ。親世代は老いとともに経済力が低下し、生活力も低下し、まして地域社会との連携も薄れてくるのが現状です。我が子のそのような状況と自分と我が子との関係の問題、つまり、もう支え切れない状況に悩み続けた結果、生じてしまった事件が多いのではないかと心を痛めています。この事件の背景と同様なことは私たちが住む身近な、近隣の家庭の中にも見え隠れしているのではないかという気がします。

本市だけの事情ではありませんが、先ほど先生のご講演の中にもありましたが、「パラサイト・シングル」がそのまま「層」になって「8050問題」の枠に移行した場合、社会経済がどうなっていくのか、とても危惧しているところです。

○山田先生 ありがとうございます。ほかにいかがですか。市長どうぞ。

○並木市長 宮下委員が発言された社会経済や環境という部分に関連しますが、私が委員長を務めています「東久留米市空家対策協議会」で、対策を内容とする計画を策定しました。東久留米市は都内でも持ち家の比率が高い方ですが、その中でも高齢化率も高いということで、超高齢化の年齢構成の当市において年金暮らしの方も非常に多いところではあります。

未婚で無職かつ親元同居という方もいらっしゃいますので、まさしく親が亡くなれば後は生活が大変厳しくなられるだろうと危惧されます。なので、持ち家であってもそれを維持していくのが困難であることは想定できますし、子どもが亡くなって家を継いだり処分する人がいない場合は空き家として放置されることも想定できますので、多くの問題を抱えているのではないかと考えています。

実は、本日のテーマをいろいろ考えている時に、一度「8050問題」について教育委員会の皆さんともご議論したいという思いに至った背景はそういった部分もありましたので、発言させていただきました。

○山田先生 ありがとうございます。ほかにいかがですか。

○細田教育委員 空き家対策を例としても既に問題が顕在化しているわけですから、「引きこもり対策なんて余計なお世話だ」と言われも、行政として何かできないかと日ごろから思っています。市の「8050問題」とは、元気だった「80」がいなくなった時の「50」の生き方につながると思います。「50」の方々もわれわれも一人で生きていけるわけではありませんから、社会との関わり方について理解してもらう必要はあるだろうと思います。

○山田先生 ありがとうございます。ほかにいかがですか。

○尾関教育委員 市長と教育委員会がこういうところで市の課題を協議し、対策をすり合わせていくことは小さな一歩かもしれませんが、実は大きな一歩につながるのではないかと思います。

本日のテーマもそうですが、さまざまな市の課題は一見「教育」に関係ないと思われがちですが、深いところで「教育」が関わっていますから、そういうところで「総合教育会議」は意義がある場であると思います。

2 東久留米市は「8050問題」にどう立ち向かうのか…

○山田先生 ありがとうございます。

さて、いよいよここからは東久留米市が「8050問題」に、どう向かい合っていくのかを考えていきたいと思います。この問題についての自治体の対応としては、「8050問題」の認識を関係職員が共有するための研修の開催や、窓口による相談業務やカウンセリングの充実、関係部署との連携などの「情報共有」「支援」が中心となると思います。ですが、せつかくの「総合教育会議」という場ですし、パネラーの多数は教育委員の皆さんですので「教育的視点」から考えていきたいと思います。

ご意見はありますか。

○馬場教育委員 「8050問題」はいわゆる箱物といったハードな面の対応というのではなく、人に関するソフトの問題です。人生には分岐点があると言いますか、それぞれの人にターニングポイントがあります。現時点での対応も大切だと思いますが、「8050問題」に至るまでの幼少期、学童期、青年期など、何段階ものターニングポイントにおいて、その都度、適した対応があるのだと思います。

そのうち、主に学童期については市の教育委員会が積極的に関わることができそうですし、さらに言えば、青年期までも学校教育や生涯教育という「教育的観点から」捉えて考えていけるのではないかと考えています。

○山田先生 ありがとうございます。

「教育的観点から」というご発言が出ました。生涯教育という言葉もありますから、必ずしも学童期だけが教育の場ではありませんので、教育的観点で中高年の引きこもりを見ていくことも必要だと思っています。ほかにいかがでしょうか。

○宮下教育委員 いろいろご意見が出てきましたが、ここで一つ方向性を確認しておきたいと思いますがよろしいでしょうか。

山田先生、市長、教育長、それから我々教育委員はそれぞれこの問題に対する共通点、差異点を含めて様々な考え方を持っていると思います。それらの考えの公約数を大前提にして考えてみますと、「様々な事情はあるが不登校や引きこもりは個人にとっても社会にとっても大きな損失である。復学や社会参加につなぐことが必要である」ということが根底にはあるのではないかと考えています。そして、何とかしようという気持ちは皆さん同じではないかと私は思っています。

しかし、「個人が幸せを追求する権利」「自由に生きる権利」「個人の生き方に他人がどうこう言うものではない」とかの議論に傾きますと、なかなか対応策を発言しにくいのですが、どう考えたらよろしいでしょうか。

○山田先生 すごく難しい問題です。どなたかご意見はありますか。

○細田教育委員 私もそう思います。不登校の児童・生徒に対する支援の在り方についても、登校させてあげたいが、それだけを目指さずに、フリースクールなどの民間施設やNPO等の機関を利用することもいいのではないかと意見もあります。

「引きこもり」についても、引きこもりを一気に「なくしていく」ということではなく、「これまでの生活を無理なく続けられるようにする仕組みが必要である」などの意見にも、当然ですが、私たちは耳を傾けていかなければなりません。発言しながら

も本当に難しく、市長は難しいテーマを選ばれたと思っています。

○山田先生 ということですが、市長いかがでしょうか。

○並木市長 はい。皆さんの討論を聞いていても本当に難しいテーマだと感じています。宮下委員の言われるとおり、「個人の生きる権利などを前にするとなかなか意見も言いづらい」ということもあります。考えれば考えるほど難しいテーマだと感じています。

私は、幼少期、子ども期、青年期という時期は問題や悩みにきちんと向き合い、周りの助言をもらいながら、納得して、納得しなくても乗り越え、解決していかななくてはならない時期だと思っています。この「向き合っている時間」というものが、外見は不登校や引きこもりという態度に出ているという考えもあるのかもしれないと、この間、意見を聞きながら感じたところです。

○山田先生 ありがとうございます。ほかにありますか。

○馬場教育委員 ただ今の市長の「向き合っている時間」という発言ですが、まさしくそうなのだろうと思います。つらいけれども自分で考えて解決する、乗り越える以外に前には進めないと思います。大変ですが、その一步を支える親でありたいと思いますし、先生方にもそれをお願いしたいと思いました。

○山田先生 ありがとうございます。細田委員どうぞ。

○細田教育委員 その「向き合っている時間」ですが、原因が複雑で混沌としているようであれば、ほどくのを手伝ってあげればいいと思います。よく「見守る」と言いますが、決して「甘やかし」になってはいけませんし、じっと見守り過ぎて、きっかけのタイミングを逃してしまうのではないかと思います。

○山田先生 ありがとうございます。ほかにいかがですか。

○尾関教育委員 以前、事務局からもらった資料ですが、「全国都道府県教育長協議会」が社会生活などに困難がある子どもと若者を対象にした調査研究の報告書があります。そこには、行政のできることで、「社会生活を営むための人とつながる力を育成していくことが重要であり、当事者のニーズや意識の把握、関係機関のネットワークの現状を共有する」とされています。

都道府県教育長会のものなので、対象は小・中学生ではなく高校生世代の若者ですが、高校生からの引きこもりや不登校は、「とにかくいち早く解決させていくこと」が大事だということです。東京都教育委員会の事例がありますが、都立高校の中途退学者が多い高校には若者の支援を行っているNPOが機会を逃さないように訪問し、就労や就学などの進路につなげることを行っているそうです。解決のタイミングを見逃さないことが大事だと思いました。近隣市の例としては、小平市の取り組みが取り上げられていました。「公民館ヤングセミナー」で、就活を行っている学生や若手会社員のための働く力養成講座というそうです。

細田委員が言われたとおり、子ども時代、青少年時代に、二重三重の、甘やかしてはない「見守り」を行うことが必要だと強く思います。

○山田先生 ありがとうございます。

そうですね。若い人たちへの取り組みも始まっているところです。行政として機を

逃さないことが大切になってきますね。ほかにありますか。

○馬場教育委員 尾関委員のご発言に関連しますが、国や東京都に比べると予算や組織の規模の違いから、本市では例年新しい事業を実施していくのは難しいと思います。

なので、職員の方には既存の事業内容であっても例年と同じように行うのではなく、事業が小規模であっても世の中の動向を認識したプラスアルファのものを企画し、実施して行ってほしいと思っています。

そして、対応する職員の方々、先生方、保護者も一人一人の心のギアを少しだけ上げていていただければと思います。先ほど細田委員が言われていましたが、決して甘やかしではない優しさで、怒りではない厳しさで、そういった姿勢で子どもたちに対して目を向けていただければと思います。

○山田先生 ありがとうございます。とてもいい言葉ですね。宮下委員どうぞ。

○宮下教育委員 尾関委員が触れられた小平市の件ですが、私もその取り組みについては資料を拝見しました。小平市がどうしてそのような取り組みをしたかということ、その当時の若者の離職の増加やニートの増加があったからということ、市が若者の動向をいち早く分析して、そしてその解決策の取組を考えていたということではないかと思います。

本日のテーマですが、まさしく本市が社会状況をいち早くとらえたことになると思います。本市でも今後このような取り組みをしていくことが必要ですし、取り組めることだと思います。職員の皆様に期待していきたいと思います。

○山田先生 ありがとうございます。ほかにありますか。

○馬場教育委員 学校教育の分野から発言します。学校教育はその成長段階に応じた「学力」が身につくことを求められています。「学力」が本来目指すものは物事を自分で考え、判断し、自分と相手を大切に思えることだと思います。

本市の教育目標の柱の一つである「自ら学び行動する人間」であるように、そして、全体を通して生き抜く力を育まなければならないと思います。これから日本の教育の力が試されている、生き抜く力が問われているのではないかと思います。なので、その大切な時期に様々な学習方法があるにしても、学校という場で学ぶ意義がありますから、不登校から復学への道を個々に沿った形で用意してあげられないかなと思っています。

先ほどの資料からも分かりますが、本市の小・中学校では年度にもよりますが明らかに小学校の方が中学校よりも復学率が高いので、低学年のうちから丁寧なケアをお願いしたいと思います。

○山田先生 ありがとうございます。宮下委員どうぞ。

○宮下教育委員 私も、今の世の中は生き抜く力が問われているのではないかと強く感じています。不登校と引きこもりは年齢や社会との関りによって使い分けられていると思いますが、どちらにも生き抜く力が大きく関係していますね。

山田先生の基調講演を拝聴し、また、この意見交換を通して、不登校から引きこもりに続くことを残念に思う気持ちから、不登校になる前、つまり低学年の時から「免疫体質」、言葉を変えれば「抵抗力のある心」といってよろしいでしょうか、それを

育てることが有益なのではないかと考えました。

具体的に何をするかについて、少しお話をさせていただきます。大きく三つのことが考えられると思います。一つ目は「経験から学ぶ」ことです。ネガティブな小さな経験をたくさん積ませることで、失敗したり、つまづいたり、そして気持ちが落ち込んでも、小さな経験ですぐに立ち直ることができます。自ずと回復力が育ってくると思います。また、柔軟性や適応性も養えると思います。二つ目は子どもに「我慢を覚えさせる」ことです。安易に物を買えば与え過ぎると手に入れるための努力や我慢ができなくなって、自分の気持ちさえも抑えられなくなってしまいます。

こんな子どもたちへの教訓の句が私の頭を通り過ぎていきます。こんな句です。「惜しみなく物を与える子どもに 慈悲を与えぬ親の無慈悲さ」。どなたか読まれたか存じ上げていませんが、いつも心の中に、これは子育てへの風刺でもあるかなという気がします。三つ目は、小さい時から「危機管理意識を育む」ことです。大人が子どもの発達段階に応じて、繰り返し、不登校や引きこもりについて伝え続けることです。「あなたが学校に通う何年間のうちには、もう学校に行きたくないという気持ちになることがあるかもしれない。もっと大きくなると、もう会社にも行きたくない、外にも出たくないという気持ちになることもあるかもしれない」と。つまり、小さい時から「人には必ず困難な、自分はどうだめなのかと認めてしまうようなことが起こるもの」という意識と、それに対応できるスキルを形成することが大切だと思います。

先ほど尾関委員も、「人生におけるトラブルの回避は、経験値の差によるものが大きいのでは」と発言されました。まさに、子ども版「処世術」とも言えるかもしれません。これら三つのことを行うのに大きな予算は必要ありません。親や教師をはじめ、子どもを取り巻く大人が繰り返し話をするだけですから、できることだと思います。

○山田先生 ありがとうございます。ほかにありますか。市長どうぞ。

○並木市長 宮下委員と馬場委員のご発言を踏まえて感じたことがあります。生きる力というか、将来にわたる免疫をつくっていくことが大切であるということです。免疫は少しずつ経験で学んでいくことで培われ、それは真に必要なものであると。

また、市の予算が大変厳しい中で、現在ある部分の中で様々な工夫ができないかというご提言であったと思います。

私は皆様のご意見を伺いながら、本市で行われている「がん教育」について考えていました。「がん」は死亡の原因として最も高く、児童・生徒においても今や身近な病気ではないかと思っています。この病気の中から何かを学び、経験し、感じ取るということは、子どもたちを脅すわけではありませんが、そういったことを身近に感じることで委員がおっしゃられた経験値と言いますか、生きる力や危機管理意識の醸成につながると思います。困難な事態を迎えたときにどのように乗り越えていくのかという連想にも、この疑似体験の中で経験ができるのではないかと感じました。そういったことも学ばせていただきました。

○山田先生 ありがとうございます。

「不登校」になるかもしれない時期と学校を卒業して社会参加・社会活動に向かう時期とでは、当然ながら支援する内容も違ってきます。子どもはずっとそのままでい

るわけではなく、不登校であろうとなかろうと青少年期を迎え、職業に就くという次のステップに向かうわけです。なので、そのステップに乗れることが人生の岐路になるのではないかと考えています。私は、「職業に就く」ということは収入を得るといふ必要に迫られての経済活動のほかに、何事にも及ぶ「自立している」という自信をもてる、深い意義があると思っています。

本日のテーマ全体に及ぶことですが、ポイントとしては「やり直しがきく社会にすること」なのだと思います。不登校や引きこもりが年を追って増えていく状況は、実はなかなかやり直しがききにくい状況にあるということの現れです。やり直しがききやすいようにサポートするにはどうしたらいいのかを考えていく必要があります。

それではそろそろまとめに入らせていただきたいと思います。

市長と教育長に伺いたいと思います。教育長からお願いします。

○園田教育長 本日はありがとうございました。

先ほどもやり直しのきく社会というお話がありました。私どもが担当している教育分野の観点で話をしますと、先生から何度かお話があったように職業に就くということは大事なことですし、そこで社会で一定の役割を果たす、生活の糧を得ることが大事なのだと思います。最終的には大学、短大、専門学校のいわゆる就職活動の中でその道筋ができていくわけですが、そこでだけ就職につながるというわけではなくて、学校教育全般の長い年月の中でそういうことが行われていく。これはまさに、今日配付していただいた資料の24ページ、33ページにあるパイプラインシステムになります。大学の段階で就職を考える前には小学校や中学校という義務教育の段階があって、そういう段階を経て職業につながっていく。私どもの大きな役割としては、高等学校等につながるこの部分を担当していくところにあると思います。15歳において、ここに書かれてあるとおりの様々な選択肢がある。そしてまたこれは義務教育とは違って、選択をするのだと。自らの意思で子どもが自分の行きたいコースを選択して選び、それから先の人生を生きていくのだという、人生の中の大きな節目であると思います。ここからある意味それぞれの人たちの人生が始まるスタートだと思いますし、義務教育のここに行けという学校に行くのではなくて、自ら選んだ人生が発効するというので、非常に素晴らしいことだと思いますが、ある意味ではとても怖い、突き放されるような思いもある中での選択肢だと思います。

そういう意味では小学校、中学校を通じてのキャリア教育、進路指導が大事だと思います。就職活動ではよく自己分析と業界研究が大事だということを大学でもご指導されると思いますが、学校選択においてもそれぞれの学校を分析して自分自身の適性、自分はどんな人間でどんなことに向いているのかを考えて進路を選んでいくことが大事です。一義的に私どもは学校教育の立場としては進路指導やキャリア教育を一生懸命やっていくことが大事だと思います。そうは言っても、そればかりではなくて学校生活全般の学業だとか部活だとか学校行事などの活動を通じて様々な葛藤があり、あるいは先ほどの議論の中で経験値を上げるという話がありましたが、様々な活動を通して経験値を上げていって人生の節目節目の大事な時期に自分自身の適性をよく考えて、それにふさわしい道を選んでいくことが大事だと思いますし、そういったことで

教育分野としても貢献していきたいと考えています。

○山田先生 ありがとうございます。

キャリア教育に「失敗したらどうするか」という教育も加えていただくと本当にありがたいと思います。では最後にまとめを市長にお願いします。

○並木市長 大変難しいまとめになりました。

今回の議論を通じて何点か感じるところがあります。不登校については個々の状況に合わせて丁寧に対応していくこと、いろいろな経験値を積みながら免疫を、生きる力をつけていっていただける教育を工夫して実践していただきたいと思います。優しさを持ちながら、その子の生きる力を育てていただきたいと思います。

さて、今回のテーマは「8050」でした。引きこもりにある方を社会にどのように参加していってもらえるのか、どのように後押ししていけるのか、どのような手だてがあるのかを考えていました。先ほど来、山田先生から「やり直しがきく社会の構築が今後の大きな手立てになる」とお話がありました。また、基調講演で「絶望を感じている中であってもどこかに希望があることを伝えていくことが生きる力のもう一つのエネルギーにもなる」とお話されましたが、改めて私もそう感じました。

社会に出ていけばいろいろなチャンスがある。そのチャンスを勝ち取るためには自分の中の生きる力、頑張る力が必要なんだと。このことを子どもたちが感じて理解してくれることが大切だと思っています。

テクニク的な部分になるかもしれませんが、社会に触れ合えるきっかけとして地域でボランティアをしたり、簡単な仕事をするのを重ねながら、自分の経験値を上げていくことでよりスムーズに社会に入っていけるのではないかと思います。

この2時間の中でそういったことを感じました。予算がない中ではありますが、教育現場でいろいろ工夫をしながら、子どもたちに力を与えてられるような支援をしていただければと思います。

○山田先生 ありがとうございます。

私自身もこの数時間で解決策が出るものではない難しいテーマだと思っています。

しかしそういう問題を、公開で、市長と教育委員会の皆さんが意見交換されたということは、東久留米市がこの問題に取り組む熱意が本当にあるのだと受け取らせていただきました。本日はありがとうございました。

○道辻企画調整課長 山田先生、ありがとうございました。

最後に、次回の総合教育会議のご案内をさせていただきます。

明後日の11月9日月曜日の午前10時15分から市役所7階703会議室において、教育費に係る令和3年度当初予算を議題に開催します。

◎閉会の宣告

○道辻企画調整課長 以上で令和2年度第1回東久留米市総合教育会議を終了します。
長時間ありがとうございました。（拍手）

（閉会 午後4時30分）

東久留米市総合教育会議第8の規定により、ここに署名する。

令和2年11月27日

市長 並木克巳 (自書)

教育長 園田喜雄 (自書)